（課程博士・様式７）（Doctoral degree with coursework,Form 7）

学 位 論 文 要 旨

Summary of Doctoral Thesis

専　　攻：　共同教科開発学専攻　　氏　名：　大島　光代

論文題目：　発達障害幼児の音韻意識及び語彙の獲得を目的とした言語指導プログラム開発に関する研究

論文要旨：

本研究の目的は、「就学後に必要となる『読み』の力の基礎となる年長児の文字認知、音韻意識及び語彙の獲得状況を把握した上で、保育園や幼稚園等の幼児教育施設の言語環境が音韻意識・語彙の獲得にどのような影響を与えるかを踏まえて、発達性読み書き障害を含む就学前の発達障害幼児への指導・支援のための言語指導プログラムを開発し、その有効性を確認すること」である。この言語指導プログラムの活用によって、日本語の発達性読み書き障害幼児の効果的な指導・支援方法の確立に向けた知見につなげる。プログラム開発における目的としては、海外で有効性が確認された発達性読み書き障害児向けの言語指導プログラムのコンセプトに基づき、聴覚障害児教育の幼児向け言語指導おける日本語の音韻意識の指導スキルを融合すること、日本に現存する音韻意識の獲得から言語指導を行うプログラムの長所を活用し、音韻の視覚化教材を新たに制作し、著者が開発した聴覚障害児向けの言語指導プログラムをベースに改編を行うこととする。

第１章では、これまで国内外で報告されている発達性読み書き障害に関する研究を、歴史や定義、その要因から測定、指導方法、幼児への介入などの点から整理し、特にわが国の幼児教育施設の３法令（幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領）の改訂における早期支援の位置づけ、さらにLDの困難性（読み書き障害）にかかる文字の位置づけを障害予防の視点から分析した。これらの分析より、①日本では幼小接続期にある年長児の「読み」の力につながる基礎的な力である音韻意識の獲得及び語彙の獲得状況の概観をつかむ基礎研究が少ないこと、②幼児の音韻意識の獲得や語彙の獲得は、保育環境のうちの保育者の言葉がけや言語環境によって差異が生じると思われるが、日本における言語にかかわる保育環境の研究も少ないこと、③発達性読み書き障害研究においては、早期介入に関する研究も十分には行われておらず、就学前の幼児向けの指導・支援方法の研究は数少ないという課題を挙げた。

第２章では、第１章の①を解決するために、幼児の音韻意識及び語彙の獲得、文字認知に関する基礎研究を行った。具体的には、音韻意識及び語彙の獲得状況を把握する為、日本語の音韻のほとん

どを網羅した絵カード教材 184 枚を作成し、この教材を活用して、「清音」「濁音・半濁音」「撥音」「促音」「拗音」「拗長音」別に、障害児と健常児の音韻意識及び語彙の獲得状況の比較を行った。また、第 1 章の②を解決するために、調査対象のクラスごとに音韻意識及び語彙の獲得状況を比較し、保育者の言葉がけや言語環境との関連性を分析した。さらに標準化された言語力テストを用いて「読み」の力につながる基礎的な力の獲得状況（語の理解・図形の弁別・音節の分解・音節の抽出・文字認知・文の理解）調査により、認知能力が低くないにもかかわらず音韻意識の獲得や文字認知がすすまない幼児の存在を確認した。発達性読み書き障害を疑う幼児である。

第 3 章では、第 1 章の③を解決するために、幼児への早期介入プログラムの開発に関する予備的な研究を行った。ここでは、第 1 章の海外の先行研究で有効性が高いとされた Hatcher(2006)の The Reading with Phonology Program(R＋P プログラム)「読みの指導と音韻意識の指導（R＋P)」のコンセプトには、日本の聴覚障害児教育のスキルと共通するものがあること、日本に現存する音韻意識の獲得から指導する言語指導プログラムには、それぞれ独自の音韻の視覚化教材が存在することを明らかにし、この 2 つの知見を基に聴覚障害児教育のスキルを融合し、新たな視覚化教材「音韻シート」をプログラムに組み込み、幼児向け言語指導プログラムを制作した。

第 4 章では、言語力テストにより判明した発達性読み書き障害が疑われる幼児 3 名に対し、言語指導プログラムを試用し効果を検証するための実践的な研究を行った。その結果、遊びを通した音韻分解課題や、文字提示や文字活用、文字と発音を結び付ける「音韻－視覚の対連合学習」により文字認知が促進されることが明らかとなった。聴覚障害児教育の指導スキルである発音誘導・発音指導が、音韻意識の獲得にも有効であった。幼児 3 名は、指導前には文を読み内容を理解することが困難な状況から、指導後には文を読み内容を理解することが可能な状況に至ったことから、発達障害幼児向け言語指導プログラムが、症状が異なる発達性読み書き障害幼児の音韻意識の獲得や文字認知を促進することを確認した。

今後は、本研究により得られた知見を活かし、日本語の発達性読み書き障害幼児の効果的な指導・支援方法を確立するとともに、「言葉領域のアプローチカリキュラム」に発達性読み書き障害幼児を含めた「読み」につながる基礎的な力の育成の方法を組み込む研究に発展させたいと考える。